

## 明治期中等学校図画教員の研究（5）

— 東京府 —

金子一夫\*

（1989年9月9日受理）

## Drawing Teachers of Secondary Schools in the Meiji Era (V)

Kazuo KANEKO

(Received September 9, 1989)

## 1. はじめに

本稿は『茨城大学教育学部紀要』第37号（1988）、第38号（1989）および『茨城大学教育学部教育研究所紀要』第20号（1988）、第21号（1989）に発表した同題の論文(1)～(4)に続くものである。明治期の東京府下の中等学校図画教員の勤務状況を網羅的に明らかにすることを目的としている。ただ、東京府下の中等学校およびそれに近い学校はかなり多いので、私立の女学校と実業学校を(6)以降にまわした。前稿と同じように図画教員勤務一覧表を作り、各学校ごとに簡単な説明をつける方法をとった。東京府下の私立学校は早くから設立されたものが多く、その組織の変遷は図画科設置とも関連するので、学校の歴史にも簡単に触れた。なお、官立中等学校は別稿にまとめる予定である。

## 2. 公立学校

東京府青山師範——前稿「明治期師範学校図画教員の研究」（『茨城大学教育学部紀要』第32号，1983年）に発表した内容と大きな変化はないが、図画教員の経歴で新にわかったことがあるので触れておく。すわなち、高橋元亨は明治六年七月から川上寛と宮本三平に、明治九年五月から中丸精十郎に学んだ初期洋画家である<sup>1)</sup>。また、高島信は旧姓を水野といい、明治十年代前半に小山正太郎か十一会研究所に学んだ。後年浅井忠に学んだり、黒田清輝とつきあったりした画家。永峰茂吉以降はずっと毛筆画系の図画教員が続く。赤津隆助に関しては青巒社編の伝記『赤津隆助』（赤津隆助先生記念出版会，昭和51年）がある。赤津は明治三十五年東京府師範学校を卒業すると同時に同校附属小学校訓導となり、四十一年から本校兼務（教諭心得）となる。本務としては昭和八年まで勤務する。

---

\* 茨城大学教育学部美術科教育研究室。

東京府豊島師範——最初は原田義作が手工とともに図画も担当し、明治四十五年三月に千葉県師範から井上良慶が転任してきてからは、専ら井上が担当したと思われる。

東京府女子師範——東京都公文書館所蔵旧東京府学務課文書（以下学務課文書と略称）により任免期日を特定した。岡吉寿は明治三十三年当校図画教授嘱託となるが、同年八月東京府第二高等女学校教諭となったので、当校は兼務の形となる。学務課文書によれば明治三十五年四月から一年間兼務を免じられている。その一年間に別な図画教員が勤務したかどうかは不明。

岡は福井県出身、上京して狩野友信に洋画と日本画を学んだ後、狩野芳崖とフェノロサに就く。明治二十二年東京美術学校に第一回生として入学するが、翌年九月退学して高等師範学校附属学校教授係補助として雇われる。岡倉ら毛筆画教育推進派によって学校教育の中心である高等師範学校に毛筆画教育の研究推進のため派遣されたのである。それに反対する同校の図画教員小山正太郎は同年十月に辞職した。岡は二十五年に高等師範本校の教授嘱託にもなるが、二十八年長崎県の活水女学校に勤務していた白浜徹と勤務を交代する形で辞職。三十三年まで長崎県で図画教員をした後に再び上京して東京府女子師範学校の図画教員になった。退任時期は、はっきりしないが、明治四十三年に谷籙太郎が赴任するので、その付近ではないかと思われる。

谷籙太郎は大正時代に自由画と対立する旭出会（後の新図画教育会）の中心的存在となる人。また、四十二年に梅村久磨作が赴任するが、岡や谷がいたので主に手工を担当したと思われる。

第一中学——図画教員の勤務期間等は学務課文書および『日比谷高校百年史』（昭和54年）、同校同窓会如蘭会の会員名簿等参照。ただし、高橋元亨以前は学務課文書により推定。吉田信孝の経歴は不明。『西洋画手本』（明治13年3月板権免許）の著者なので図画教員と推定。渡辺周蔵は高橋由一の天絵社の門人。高橋元亨は青山師範の項で既述。塚田保三は高橋と同じ中丸精十郎門下。十八年間勤務する。野村文挙や浅井忠の手本を使ったらしい<sup>2)</sup>。鶴川俊三郎、柿山蕃雄、高城次郎と東京美術学校日本画科を明治三十年七月に卒業した教員が続く。鶴川は教育的図画の理念を確立した「普通教育ニ於ケル図画取調委員会」の委員になったり、図画教育会の委員や図画共励会の会長として活躍した。柿山も明治三十二年から高等師範学校附属小学校図画科教授嘱託を勤め、教育的図画の確立に寄与したが、明治三十九年に病没。高城次郎は昭和7年までの長期にわたって第一中学に勤務した。高城は教員や生徒に非常に好かれたという。

第二中学——勤務期間等は学務課文書および同校同窓会『紫芳会々員名簿』（昭和56年）より確定。明治十二年九月に第二中学が設置され、十三年七月から十二月までの短期間、師範学校の高橋元亨が図画教員を兼任する。そして、十四年六月に第一中学の方が第二中学に合併し東京府中学となり、後の府立第一中学に続くのであるが、名称が混乱するので、この第二中学は明治三十四年設置の第二中学と同じ欄に示す。さて、三十四年設置の第二中学は四十三年の小倉要を除き、西洋画系の図画教員が続く。窪田喜作は岐阜県出身、松原康雄は岡山県出身で共に東京美術学校西洋画科卒業。木村想平は徳島県尋常師範学校卒業して横浜の小学校に勤めた後、小山正太郎の不同舎に学んだ。柴田節蔵は栃木県真岡中学の項で既述。

第三中学——勤務期間等は学務課文書より確定。最初は、第一中学の項で述べた塚田保三が教える。次に上田要は青森県尋常師範学校卒業で習字科と毛筆画の免許状をもち両科を担当するが、明治三十七年没。内野猛は宮城県出身で、明治二十九年四月から一ヵ月ほど明治美術学校、さらに六月から夏井潔（貞蔵）に木炭画や水彩画を学んだ。三十年に東京美術学校に入学し、三十五年同校

西洋画科を卒業した。内野が赴任してからは、先に述べた上田要は主に習字を担当した。

**第四中学**——勤務期間等は学務課文書を参照した。第四中学は明治二十一年に私立補充中学校として発足、二十四年私立共立中学校と改称した。明治二十七年府立となり城北尋常中学、さらに三十四年第四中学となった。明治二十六年より四十三年頃までずっと松本富五郎が図画教員を勤める。それ以前の図画教員は不明。松本は滋賀県出身で明治十二年に当時滋賀県師範学校の図画教員であった松井昇に学ぶ。その後上京し、明治十四年二月から本多錦吉郎の彰技堂に学び十六年七月卒業。茨城県師範学校や長野県中学校の図画教員をした後、私立共立中学校時代の当校の図画教員となる。退職時期は明らかではないが、明治四十三年十一月の学務課文書に危篤とあり、同月末に後任馬場三郎の任用願があるので、この付近で退職したと思われる。後任の馬場三郎は香川県師範学校卒業である。画学修業歴ははっきりしない。

**第一高女**——勤務期間等は学務課文書および『東京府立第一高等女学校一覽』等を参照した。結城正明は周知のように狩野勝川門下で、明治初期にはエッチング印刷を業としていたが、明治二十一年東京美術学校雇となり主に普通科の絵画を担当した。この東京美術学校雇の時期に当時の東京府高等女学校にも図画科教授嘱託として勤務した。木元平太郎は小山正太郎の不同舎に学び、東京美術学校特別ノ課程を卒業した。後に独協中学の図画教員を長く勤め、図画教育会委員としても活躍した。さらに後には児童出版美術の方で有名となる<sup>3)</sup>。森喜一については群馬県富岡中学および神奈川県立高女の高で既述したが、四十一年八月本校在職中没した。荻生守俊は天泉と号し東京美術学校で橋本雅邦に学んだ日本画家。

**第二高女**——岡吉寿については東京府女子師範学校の項で既述。

**第三高女**——勤務期間等は学務課文書を参照。生出亀之進は栃木県宇都宮高女の項でも記したが、小山正太郎の不同舎に学んだが日本画に転向した人である。第三高女でも毛筆画を主に教えたと思われる。今井伴次郎は大正期に新図画教育会の一員として名を知られる。約三十年間第三高女に勤務する。

**第四高女**——井岡の就任時期は学務課文書を参照。第四高女が八王子織染学校と近かったためであろうが、井岡は両校兼務の図画教員であった。

### 3. 私立中学校

**開成中学**——明治四年創立。共立学校と称し、明治二十四年から尋常中学共立学校と称する。そして、二十八年から三十四年までは府立開成尋常中学校となったが、その後再び私立となったので、この節で扱う。図画教員の勤務期間等は学務課文書および『東京開成中学校校史資料』（昭和11年）等を参照したが、一部を除き正確な年月までは判明しなかった。明治四年の創立であるが、画学は明治二十年の科目改正によって、設置されたので、図画教員の勤務はそれ以降のことになる。

山田成章は近代美術史において次項で述べる山岡成章と間違われやすいが、全くの別人<sup>4)</sup>。山田は大阪府出身で高橋由一の天絵社に学び洋画も描いたが、日本画も描いたらしく洋風画出品が拒否された第一、二回の内国絵画共進会に出品している。勤務歴は明治四年の大学少写生準席から始まり、文部省権少録、同編輯寮出任、文部省雇、同御用掛を経て、十六年東京大学御用掛となり十

九年非職である。医科大学で図画を描く仕事をしたとも言われるが<sup>5)</sup>、文部省雇の仕事がそれにあたるように思われる。

渡辺文三郎は周知のように五姓田芳柳の高弟で、第一高等学校の図画教員を長く勤めた。森脇英雄については栃木県真岡中学の項で既述。ただ、この共立学校勤務時代の森脇を、当時在学していた石井柏亭が回想している<sup>6)</sup>。松井昇の手本を使い、写生画の宿題などもあったという。後任の中山次郎から東京美術学校日本画科卒業の図画教員が続く。岡田秀、高城次郎はこの共立中学校の卒業生でもある。岡田は後に東京美術学校の図画教授法担当の教授となる。高城が転任先の府立第一中学の教員と生徒から非常に好かれたと言われることは既に述べた。

明治義会中学——明治二十三年創立、明治三十七年頃廃校となる。経歴の立派な多くの教員を講師にしていたが、学務課文書中に教育条件が悪いと指摘している書類もある。図画教員はずっと山岡成章である。山岡は『小学画学書』（明治6年）や『図法階梯』（明治9、10年改定版）の編者や東京大学および同予備門の図画教員として知られ、いわば明治初期図画教育の有名であった。明治十九年東京農林学校助教、二十三年農林大学書記、二十四年同技師、二十六年同嘱託講師（ただし、授業がないため休職）となる。以上のような山岡の勤務の変化は、専門化していく教育の中で明治初期図画教育が力を弱めていく様子を象徴している。そこで山岡も明治中期から、いくつかの中学で講師を勤めるのである。

正則中学——勤務期間等は学務課文書等を参照した。また、震災および戦災のため現在の正則高校に資料等はほとんど残っていないとのことである。明治二十二年創立。創立から三十一年までの図画教員は、はっきりしない。明治三十一年から東京美術学校西洋画科選科を卒業した小林万吾が図画教授嘱託となる。小林は三十二年東京美術学校助手、三十七年助教授となるが、正則中学の講師は四十四年まで続けている。また、明治三十三年の学務課文書に各中等学校に教員一覧を提出させてまとめた書類があり、そこには小林の就職が明治二十八年十二月と記されている。東京美術学校旧職員履歴には三十一年の嘱託からしか記されていない。二十八年から三十一年までの小林は黒田清輝の塾生、そして東京美術学校の学生であった。この期間の正則中学の小林の勤務は、とりあえず未確認としておく。小林の後任は同期に東京美術学校卒業の丹羽林平。丹羽については茨城県水戸中学の項で既述。

錦城中学——学務課文書および現在の錦城学園の教示により勤務期間等推定。最初は明治義会中学の項で既述の山岡成章が図画教員。次いで明治三十年から大正末頃まで戸田忠雄が在勤。戸田は旧足利藩主の子爵の家に生まれた。最初橋本雅邦に学び、東京美術学校に入学し引続き橋本雅邦、そして川端玉章に学んだ。

攻玉社中学——旧鳥羽藩主近藤真琴が幕末に藩邸内に開いた私塾に起源をもつ。数学、英学、航海術などを主に教授した。明治二十六年青年科を改めて攻玉社尋常中学校として認可を受ける<sup>7)</sup>。図画科を教授科目したのも、これ以後と思われる。図画教員の氏名や勤務期間等は、学務課文書、『東京美術学校一覧』の卒業生の項などを参照したが、はっきりしない部分が多い。渋谷正修は図画専門ではなく、数学も担当している。宮城県でずっと小学校授業生をしていた人で、絵画修業歴不明。この渋谷と明治三十五年頃の松井昇の他は、ずっと日本画系の図画教員である。

私立中学郁文館——図画教員の勤務期間等は学務課文書および『郁文館学園九十年史』（昭和53年）等参照。松井昇は創立時付近のみの勤務。長尾奎太郎は岡山県出身で岡山県尋常師範学校中退

後、大阪で山下宥に鉛筆画を学んだ。二十五年に上京して小山正太郎の不同舎に入門。『郁文館学園九十年史』は長尾の就任を明治二十三年としているが、長尾はまだ大阪にいたので何かの間違いかと思われる。福原良三の経歴等は不明。山口大蔵については早稲田中学の項で述べる。大田谷蔵は宮城県出身で同県尋常師範学校卒業。同校在学中および卒業後も同校教諭の小圃立二に図画を学ぶ。その後東京で渡辺文三郎に就く。これは小圃の師が渡辺であったためであろう。また、橋本雅邦に就いて日本画も学んでいる。塚田保三については府立第一中学の項で既述。小林高造は明治三十六年頃、群馬県の高等小学校教員であったこと以外不明。大原鉦一郎は岐阜県師範学校出身で山本芳翠に学んだ洋画家。なお、明治三十二年に分館が設置されたが、図画教員は本館と同一なので表は省略した。

日本中学——図画教員の氏名、勤務期間等は中村成忠『旧東京英語学校改称日本中学校記事』（明治27年）、『日本中学校五十年史』（昭和21年）その他から推定。正確な勤務期間が判明したのは別な勤務校の履歴を参照できた早川銈太郎だけである。明治十八年東京英語学校として創立、明治二十年九月から図画科を教授科目に加える。最初は渡辺文三郎、明治二十四年頃は平瀬作五郎が担当したと思われる。明治二十五年八月日本中学校と改称する。図画教員は早川銈太郎、真野紀太郎と中丸精十郎門下が続く。旧教員氏名の中に横山常五郎の名がある。横山は東京美術学校特別ノ課程明治二十五年七月卒業で、二十六年三月には山梨県師範学校に就職するので、早川の前に短期間勤めたものと思われる。

商工中学——勤務期間は学務課文書を参照。郁文館の項で述べた長尾奎太郎がずっと図画教員を勤める。退任時期不明。

順天中学——起源は天保年間の大阪の順天堂塾で、明治初年東京神田に移る。明治二十六年尋常中学順天求合社として発足。図画教員の氏名および勤務期間は、現在の順天高等学校の教示および同校書類より推定。戦災による書類等焼失のため、勤務期間を完全に確定するまでは至らなかった。最初は開成中学の項で触れた森脇英雄。森脇は明治三十年十月からアメリカのカルフォルニア州のホプキンス美術学校（カルフォルニア州立大学附属）に一年間学んでいるので、二十九年末か三十年初めあたりまでの勤務と思われる。村上義和は南宗画を滝和亭に学び、後に日本画の傍ら洋画も学んだ。また、三十一年神田中学の創立者にもなっているため、あるいは教員ではなく役員の形での勤務であったかもしれない。飯塚忠遠は高橋由一の天絵社に学んだ人。井上松治については岩手県遠野中学の項で既述。井上、菊池、江南と西洋画系の教員が続く。

早稲田中学——明治二十九年の創立時より大正十五年まで、東京美術学校特別ノ課程出身の山口大蔵が勤める。山口は千葉県出身、明治二十一年頃井上莊輔と河北道介に、二十三年頃結城正明に絵画を学び、東京美術学校入学、そして二十六年同校特別ノ課程を卒業した。山口の在勤時代に万鉄五郎、曾宮一念、小泉清、内田巖らが早稲田中学に在学し、指導を受けた。山口とこれら早稲田中学生徒との交流については、鈴木秀枝「早中大正物語」中の「絵画青春譜」に詳しい<sup>8)</sup>。

成城学校——明治十七年創立、十八年開校の文武講習館として発足、十九年に成城学校と改称。学校の目的は「陸軍武学生徒入学ノ予備学科」の教授であった。いわば陸軍士官候補生および幼年学校の予備校的な目的であったが、二十二年官公立尋常中学校と同等以上の認可を得た。明治三十年に組織改正によって尋常中学科を設置、翌三十一年文部省公認の指定中学校となった<sup>9)</sup>。この尋常中学科とは別に以前から高等科もあり、純粋な中等学校ではないが、中等学校として本稿で図画

教員を見ておく。図画教員の氏名、勤務期間等は学務課文書および『成城学校八十年』（昭和40年）を参照した。陸軍武学生徒の予備校的存在であるため、陸軍諸学校教員が講師になっている場合が多い。図画においても同様である。井上莊輔は早くから陸軍士官学校に勤務し、『図学階梯』（明治19年）を著しているの、図学担当と思われる。佐々木道介も早くから陸軍兵学寮に出任している。最初は仏語の写生字で、士官学校教官であった川上寛、ゲリノーに洋画を学んだとされる。また、佐々木は成城学校発行の図画教科書『鉛筆画独学』（明治19-22年）の著者でもある。この教科書は成城学校用に作られたのだと思われる。榎本正忠は近藤正純、ゲリノーに学んだとされ、明治六年から陸軍兵学寮に出任している。春日知強の絵画修学歴は不明だが、明治十二年陸軍士官学校図学科雇となっている。伊東信秀は最初、川上寛に学び、その関係で陸軍兵学寮出任となり、ずっと士官学校勤務であった。中島孝久、保科圭三郎に関しては絵画修業歴、陸軍との関係ともに不明。権田守吉は、最初五姓田義松に洋学を学び、その後、野村内蔵輔、仏人カペレゲー、近藤正純らに図学を学んだ。成城学校以前に図画教員をしたことはないらしい。本多錦吉郎は周知のように国沢新九郎に学び、画塾彰技堂を継承した人である。明治十六年陸軍士官学校図画学教官となり、二十五年学科組織改正により図画科が幼年学校に移ると本多も勤務を移した。松井貞世は愛知県出身、英人ウルフ氏に画法を学んだ後、高橋由一の天絵学舎に学ぶ。明治十七年より陸軍士官学校に勤務した。以上のように尋常中学科を設置する明治三十一年頃までは、多数の図画教員が同時に勤めた。これは生徒数が多かったせいもあるだろうが、教科を図学と画学に分けたりして、陸軍の諸学校と同様、図画教育を重視したためと思われる。

尋常中学科設置後はずっと図画教員の数が少なくなり、それも日本画系の図画教員となる。最初は山口大蔵である。早稲田中学の項で述べたように、山口は井上莊輔、佐々木道介に学んだことがあり、その関係で成城学校の講師になったと思われる。綱島（建部）政治は静観と号す日本画家で『早稲田文学』編集に携った綱島梁川の実弟。筆谷儀三郎は等観と号す。静観とは義理の兄弟にあたる。

**麻布中学**——明治十七年創立の東洋英和学校の中等科の生徒を引受ける形で、明治二十八年設立される。最初の図画教員は山岡成章。山岡については明治義会中学の項で既述。明治三十年から白浜徹が講師となる。白浜徹は説明するまでもなく、明治後期に成立する教育図画の理論的中心人物。明治二十八年高等師範学校助教授、三十四年東京美術学校教授。麻布中学講師をやめる時期は、はっきりしないが、白浜は三十七年三月に欧米留学に出発してしまうので、それ以前にやめているはずである。佐藤豊については群馬県高崎中学の項で既述。稲葉城一は静岡県出身で本多錦吉郎に学ぶ。昭和十一年一月まで勤務して没。河原崎謙吉は、麻布中学以前に茨城県龍ヶ崎中学や千葉県成田中学に勤めたことがある。

**京華中学**——図画教員の勤務期間等は学務課文書を参照。堤雄長、鈴木武之助と東京美術学校卒業の日本画系の図画教員が続く。

**独逸協会学校中学**——品川弥次郎を中心とする独逸学協会（明治十四年創立）がドイツ学振興の目的のため、独逸協会学校として明治十六年に設立した。明治二十六年専門学校として認められる。同校初等科が中等教育に相当するが、小学教育と誤解されがちなので明治四十一年中学と改称した<sup>10)</sup>。図画教員の勤務期間等は、学務課文書、別な勤務校に提出された履歴その他を参照した。山田成章については開成中学の項で既述。佐々木三六は福井藩士で明治八年イタリアへ渡航し、トリノ市国

際学校に学び、さらに十一年から十四年までトリノ市美術学校に学んだ後に帰国。印刷局技生を経て、十八年東京大学理学部御用掛（画工）、二十一年第一高等中学校教諭、二十三年同教授となる。二十七年非職。独逸協会学校の教員は、明治三十年十月に金沢尋常中学に赴任するまで続けた。木元平太郎については、府立第一高女の項で既述したが、独逸協会学校在勤時代に、すなわち明治三十八年に日本最初の幼児向け絵雑誌『絵ばなし』を創刊している<sup>11)</sup>。

**青山学院中学**——明治十六年東京英和学校予備学部として発足。二十七年東京英和学校は青山学院と改称、予備学部も尋常中学の学科課程に近づいた。さらに二十九年予備学部は府知事の認可を受けて尋常中学部となった<sup>12)</sup>。図画教員の氏名と勤務期間等は学務課文書および現在の青山学院本部からの教示を参照した。図画教員として判明した最初の図画教員は、府立第四中学の項で触れた松本富五郎である。松本より前に図画教員がいるかどうか不明。二十六年から岩村透が図画習字担当の教員として勤務する<sup>13)</sup>。岩村は言うまでもないが、東京英和学校に二年半ほど在学した後、アメリカのいくつかの美術学校とバリのアカデミー・ジュリアンに学ぶ。帰国後は気鋭の美術評論家、美術史家となる。明治三十二年東京美術学校西洋美術史の講師、その後教授となる。岩村の後は夏井潔（貞蔵）が短期間勤める。夏井は北海道函館商船学校の項で述べたように、カルフォルニア州立大学附属美術学校卒業生。夏井の後任が小代為重で明治三十四年から昭和七年までの長期間勤務する。小代は佐賀県出身で百武兼行に洋画を学ぶ。千葉県師範学校助教諭、工科大学雇、東京電信学校助教を経て、青山学院の図画教員となる。岩村透も電信学校教員を勤めたことがあり、その関係で小代が赴任したのかもしれない。

**明治学院中学**——明治十年東京一致神学校として発足し後に東京一致英和学校と改称、明治十九年神田英和予備校と合併し明治学院となる。明治三十一年尋常中学部設置を申請し認可された<sup>14)</sup>。図画教員の勤務期間は明治学院大学史料編集室の教示および『明治学院沿革略』（大正6年）所収の旧教員表を参照。上杉熊松、藤田文蔵、田崎延次郎と工部美術学校出身の図画教員が続く。上杉、藤田はクリスチャンであった。工部美術学校出身者にはクリスチャンになった人が多い。上杉については山形県米沢中学の項で既述。藤田文蔵は鳥取県出身、上京して彰技堂で短期間画学修行した後、工部美術学校彫刻科入学。十五年六月同校卒業。彫刻専門美術学校を設立したり、十九年一月には図画取調掛雇、そのまま東京美術学校雇教員、彫刻授業嘱託として勤務し、三十三年に教授となる。三十八年病気を理由に退職。その後、女子美術学校長を勤める。田崎延次郎はやはり彰技堂を経て工部美術学校に入学し、十六年一月に修業証書を得る。本多錦吉郎の下で陸軍幼年学校の図画教員もする。谷齊一は栃木県出身で栃木県師範学校卒業後、東京美術学校に入り西洋画科卒業。東京美術学校美術解剖学の助手を短期間勤めた。上杉と藤田の間の図画教員は不明。

**慶応義塾普通部**——慶応義塾は在学生に関しては資料が多く残るが、教員についての資料が乏しい。現在の慶応義塾大学福沢研究センター所蔵の『慶応義塾学事及会計報告』の各冊にある教員一覧から図画教員の氏名、勤務期間を推定。普通部が中等教育段階にあたるが、初等教育にあたる幼稚舎にも図画教員がいて、普通部と勤務を交代したりすることもある。幼稚舎の教員と関連させて述べておく。明治二十三年一月から二十四年七月に間に幼稚舎の図画教員であったと思われる夏井潔が辞職し、その後任に能勢鶴次郎が赴任したと思われる。夏井については青山学院の項で既述。能勢は中丸精十郎の門下。二十八年から能勢は幼稚舎ばかりでなく普通部も担当する。そして、増田松之が赴任する明治四十二年に能勢は再び幼稚舎の教員に戻っている。増田は岐阜県出身で、上

京して高橋由一の天絵社に学ぶが、明治十四年四月から五姓田芳柳の門に転じる。十七年一月卒業し、自宅で開業したというが、各地で図画教員を勤めた後に慶応義塾普通部に就職する。

東京中学——明治五年上野清が設立した、数学を教える上野塾を起源とする。明治二十三年東京数学院と改称。二十四年高等中学校予備科、海軍兵学校受験科を設置し、尋常中学と学科程度を同程度とする。さらに二十六年尋常中学部を設立し認可を得る。そして明治三十二年尋常中学部を東京中学校と改称する<sup>15)</sup>。図画科を教授科目の一つにしたのは、明治二十六年からである。図画教員の氏名、勤務期間は学務課文書を参照。最初の図画教員は山岡成章。山岡については、明治義会中学の項で既述。その後は堤雄長、小倉要と東京美術学校絵画科卒業生が続く。小倉は最初橋本雅邦に学んだ人で、美術学校卒業後、皇室博物館古画模写員をしたことがある。なお、『校史—東京中学・東京高等学校』（昭和58年）によれば、以上の他に明治十年代に奥平珊三、明治三十九年以前に数学・図画担当の長谷川吉次郎、明治四十四年に図画・国漢担当の星野久成が勤務しているところある。いずれも経歴、勤務期間等を確定することはできなかった。なお、同書によれば、明治四十四年にマリー＝イーストレキが勤務しているが、図画ではなく英語担当となっている。

大成中学——ずっと松井貞世が図画教員を続ける。松井の勤務期間は現在の大成高等学校の教示による。松井については、成城学校の項で既述。

京北中学——宗教学者井上円了によって明治三十一年設立。井上は既に明治二十年に私立哲学館（後の東洋大学）を設立していたが、明治三十年明治天皇の御下賜金をきっかけに尋常中学校の設立を決意し、京北中学を設立した<sup>16)</sup>。図画教員の勤務期間等は学務課文書を参照した。設立願文書にある図画教員予定者は井上良慶である。井上良慶は井上円了の縁者と思われる。ただ、井上良慶は明治三十年から四十五年まで千葉県師範学校の助教諭さらに教諭であり、実際に京北中学で教えたかどうかは確実ではない。また明治三十二年の学務課文書中に図画教員として山岡成章を開申している京北中学の文書がある。山岡の勤務も確実ではないが、短期間勤務したのかもしれない。次の森川清は後に青山師範の図画教員となる。青山師範に提出したと思われる履歴によれば、三十三年三月から一年間、京北中学の教授嘱託をしている。森川は荒木寛敏に学び、北海道、青森県、秋田県で図画教員をした人である。次の平子尚も短期間の勤務であるが、平子は鐸嶺と号し最初三重県特選生として東京美術学校日本画科に学んだが、西洋画科に転じた。京北中学退職後に東京皇室博物館に勤務し、法隆寺研究で名を知られたが、明治四十四年に早世<sup>17)</sup>。柴崎恒信も東京美術学校西洋画科出身で、予科から本科へ進んだ生徒としては第一期卒業生となる。

海城中学——明治十八年創立の東京英華学校が二十一年海軍予備校と改称した。この海軍予備校は二十三、四年頃廃校となり、海軍少佐古賀喜三郎がこれを引継ぐ形で明治二十四年十一月新たな海軍予備校が発足した。海軍の諸学校入学者の予備校的な在り方を目的としていた。明治三十二年海軍予備校内に日比谷中学が併置され、三十三年に海軍予備校は海城学校と改称する。徐々に日比谷中学入学者が増加していき、主客転倒の様相を呈した。しかし、事情あって三十九年日比谷中学を閉鎖し、新たに海城中学校を興した<sup>18)</sup>。海城学校の方は昭和六年まで存続するが、生徒は減少していった。

図画教員の勤務期間等は学務課文書その他を参照。大久保雄輔は陸軍教導団、さらに戸山学校卒業で、西洋画を中丸精十郎に学んだ。大原鉦一郎は郁文館の項、小倉要は東京中学の項で触れた。海城中学となってからの最初の図画教員は、田口只八。田口は長崎県出身で東京美術学校図画講習



科に学んだ。日比谷中学から海城中学に転換する時期に勤務したが、明治四十三年死亡。生野恒太郎は大分県出身、東京美術学校日本画科卒業であるが、主に荒木寛に師事したという。

**立教中学**——明治七年創立のウィリアムズ学校（英語学校）が起源。二十九年英語学校を廃して立教中学と立教専修学校を設立。三十一年初めに立教尋常中学設置願を東京府に提出して認可される。なお三十年に東京英語学校を再興し、四十年には立教大学が設立されている<sup>19)</sup>。立教中学設立前から図画教員として大久保雄輔が勤務している。大久保については海城中学の項で既述したが、退職時期は不明である。なお、明治三十二年の学務課文書中に図画教員として小出魯一郎を採用のことを開申している立教中学校の文書がある。実際に小出がどのくらいの期間勤務したかどうかは確認できなかった。小出は千葉県出身で東京美術学校日本画科卒業。

**東京学院中学**——最初は明治二十八年米国バプテスト派伝道会によって東京学院という名称で設立され、明治三十二年東京学院と改称して設立願を提出し認可された。設立者はクレメントとタッピング<sup>20)</sup>。遅くとも明治三十二年からは図画科があり、当然担当者がいたはずであるが、三十六年までは担当者不明。その後は当時中等学校職員録を参照。三十七年頃は錦城中学の項で触れた戸田忠雄。三十九年頃から菊池鑄太郎が図画教員となった。菊池は彰技堂を経て工部美術学校彫刻科を卒業した。菊池は石膏模型作成を業としていたことで知られる。なお、東京学院はその後横浜に移り関東学院と改称し、現在に続いている。

**神田中学**——明治三十一年村上義和によって設立された。村上は順天中学の項で触れたように絵画修業をした人なので、図画は村上自身が担当した。三十五年頃は東京美術学校西洋画科卒業の五味和十に交代した。五味は橋本雅邦にも学び日本画も描いたらしい。神田中学への勤務は二年間くらいらしく三十七年には大阪陸軍地方幼年学校の図画教員となっている。

**芝中学**——浄土宗の宗教学校として早くから設立された。そして、明治二十年から二十三年まで図画科が教えられたが、担当者は不明。その後、図画科は廃止となり、再び図画科が設置されたのは、浄土宗第一教区宗学校と称していた明治三十四年である。同校は三十九年芝中学校と改称する<sup>21)</sup>。その頃の図画担当は大原鉦一郎である。大原については郁文館の項で触れた。その後竹之下旧俊が図画教員となる。竹之下は鹿児島県出身で芝中学の前は、新潟県高田中学校勤務。

**天台宗中学**——明治三十一年創立だが、明治四十一年頃、鶴田幾太郎が図画教員であったことだけ判明。鶴田は山梨県出身で東京美術学校日本画科を卒業した。そして、明治三十七年から大正三年まで東京美術学校日本画科の助教授を勤めた。天台宗中学へは教授囑託の形で来ていたと思われる。ただし正確な勤務期間は不明。

**豊山中学**——真言宗豊山派の大学林の附属中学校として設立される。図画教員としては、京北中学の項で触れた柴崎恒信が明治三十五年から勤めた。

**曹洞宗第一中学校**——名称の通り、曹洞宗の学校として設立。図画教員として判明している海老名明四は、東京美術学校西洋画科撰科の卒業であるが、松岡寿に教えを受けたりしているので、黒田清輝ではなく、最初は浅井忠の教室に学んだと思われる。

**日蓮宗大学中等科**——図画教員として判明しているのは、高田叔二郎だけである。高田は山田叔二郎とも言い、岡山県出身。岡山の松原三五郎の天彩学舎で西洋画を学び、上京後渡辺文三郎、本多錦吉郎に就く。一方ではフェノロサにも学び、東京美術学校に入学するが、短期間で中退。その後は黒川真頼に和文や歴史、結城正明に日本画を学んだりしている。

**高輪中学**——浄土真宗西本願寺派の学校として設立される。高輪中学と改称する明治三十九年に宗派とは絶縁したらしい。真野紀太郎は日本中学の項で触れたように中丸精十郎門下。斯波義辰、五島健三はともに東京美術学校西洋画科を明治四十三年三月に卒業した同期生である。

**聖学院中学**——明治三十九年設立。図画教員は開成中学の項で触れた森脇英雄で、高輪中学の真野紀太郎とは同じ中丸精十郎門下の友人であった。

**日本体育会荏原中学**——明治二十六年に体操練習所として設立され、三十三年体操学校と改称し、三十七年荏原中学校となった<sup>22)</sup>。体操学校時代までは図画科は教えられていない。荏原中学校となってから、井上松治、豊田宇三郎が図画教員となる。井上については順天中学の項で既述。豊田は山形県出身で山形県師範や荏内中学の図画教員を勤めた後に上京し、数年の自営を経た後に荏原中学の教員となった。

**暁星中学**——カトリックの男子修道会マリア会が明治二十一年に設立した暁星学校が起源である。三十二年暁星中学校として新たに設立願を提出し、認可された<sup>23)</sup>。暁星学校時代も暁星中学校になってからも図画は教えられたはずであるが、担当者はほとんど不明である。わずかに明治三十四年頃ストルツ、三十七年頃グドレーブンというフランス人教師が担当していることが、当時の中等学校職員録から判明しただけである。ストルツはフランスの師範学校を卒業し、五年ほどフランスの小学校で教えた人である。グドレーブンの経歴は不明。

**東斌学堂**——明治三十九年頃、有元徹三郎が図画教員であった他は、不明。学校の事項についても不明。有元については群馬県伊勢崎染織学校の項で既述。

**中等夜学校**——大原鉦一郎が明治三十九年から四十一年頃にかけて図画教員であったこと以外は不明。大原については郁文館の項で既述。

**中央中学**——明治四十三年頃、菊池香三が図画を担当したこと以外不明。菊池は順天中学の図画教員でもある。四十四年頃は愛知県第五中学校の教員となるので、いずれも短期間の勤務であることは確実である。

**高千穂中学**——明治四十一年創立。神子鉄雄が図画教員として勤務したらしいとする資料もあるが、当時神子は千葉県立園芸学校勤務であり、高千穂中学にも勤務したかどうかは未確認である。神子は東京美術学校西洋画科卒業。

## 注

- 1) 金子一夫「中丸精十郎と西洋画教育」山梨県立美術館『中丸精十郎とその時代』（同館，1988年）127-134頁。
- 2) 日比谷高校百年史編集委員会『日比谷高校百年史』（同刊行委員会，1974年）282頁。
- 3) 上笙一郎『聞き書・日本児童出版美術史』（太平出版社，1974年）35-45頁。
- 4) 青木茂「ふたりせいしょう」『萌春』第307号，1981年，25-31頁。
- 5) 平木政次『明治初期洋画壇回顧』（日本エッチング研究所出版部，1936年）61頁。
- 6) 石井柏亭『明暗』（第三書院，1934年）49，63頁。
- 7) 東京都（公文書館）『東京の中等教育 一』（東京都，1972年）90-92頁。
- 8) 早稲田中学校・高等学校『早中八十周年記念誌』（集芸社，1975年）58-122頁。

- 9) 「成城学校八十年」編纂委員会『成城学校八十年』（成城学校、1965年）。
- 10) 七十五年史編集委員会『独協学園七十五年史』（独協学園、1959年）。
- 11) 上笠一郎、前掲書。
- 12) 東京都（公文書館）、前掲書、45頁。
- 13) 東京都（公文書館）、前掲書、60-61頁。
- 14) 日本近代教育史事典編集委員会『日本近代教育史事典』（平凡社、1971年）433頁。
- 15) 校史編集委員会『校史——東京中学校・東京高等学校』（上野塾東京高等学校、1983年）。
- 16) 京北学園八十年史編集委員会『京北学園八十年史』（京北学園、1978年）27-33頁。
- 17) 松本龍之助『明治大正文学美術人名辞書』（立川文明堂、1926年）689頁。
- 18) 海城学園八十年史編集委員会『海城学園八十年史』（海城学園、1971年）。
- 19) 日本近代教育史事典編集委員会、前掲書、435頁。
- 20) 東京都（公文書館）『東京の中等教育 三』（東京都、1975年）36頁。
- 21) 東京都（公文書館）、前掲書、103-107頁。
- 22) 東京都（公文書館）、前掲書、120-123頁。
- 23) 東京都（公文書館）、前掲書、46頁。

## 付 記

本稿執筆にあたり多くの機関の方々に御教示、御協力をいただきました。以下に記して御礼申し上げます。もちろん、記述に関する一切の責任は著者にあります。

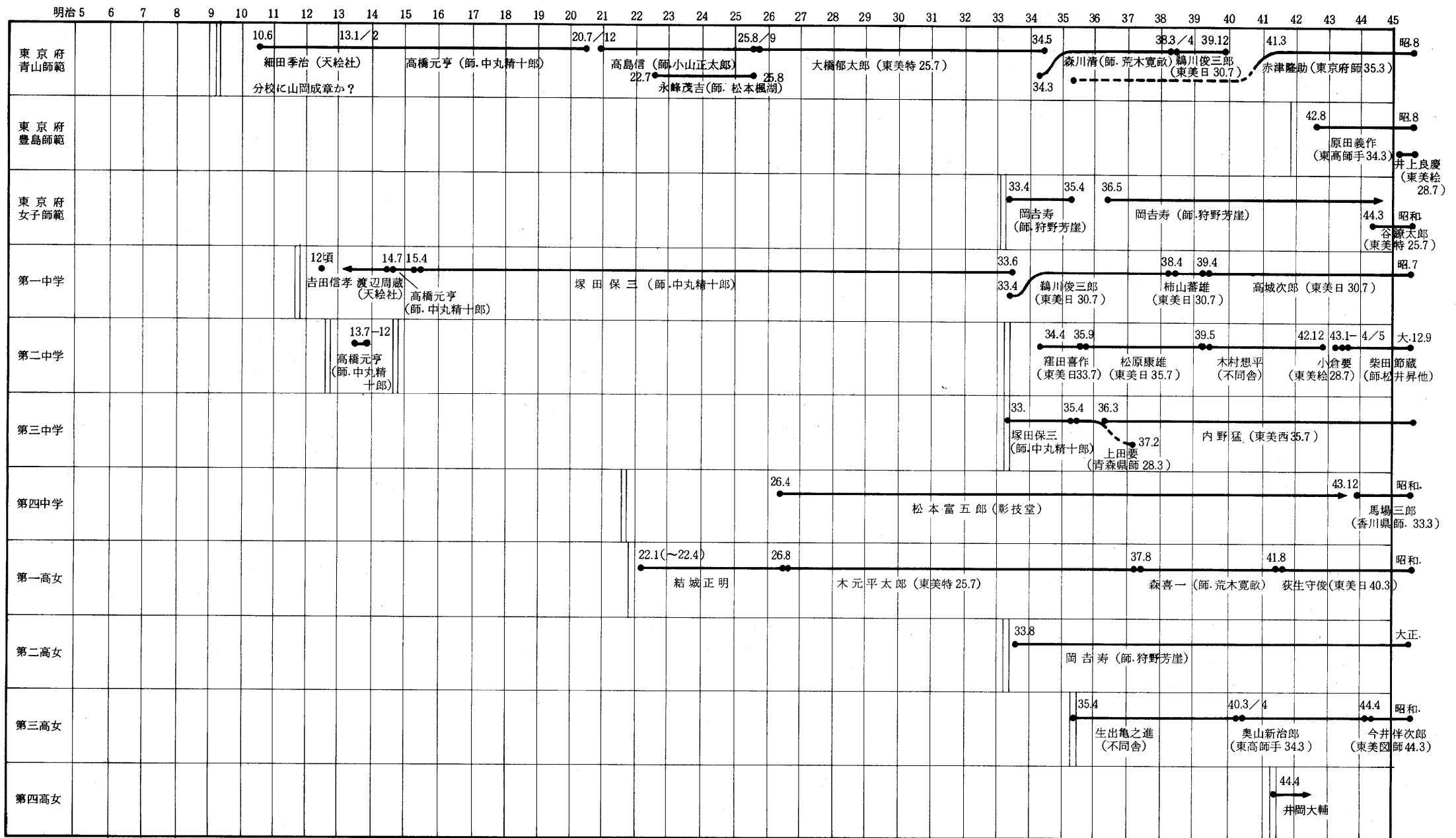
東京学芸大学、東京都立日比谷高等学校、開成高等学校、正則高等学校、錦城学園高等学校および同校相馬先生、日本学園高等学校、順天高等学校および同校三好康隆先生、独協高等学校、青山学院大学および同大学松田重夫氏、明治学院大学史料編集室および同秋山繁雄氏、慶応義塾大学福沢研究センター、大成高等学校および同校同窓会。

## 図の凡例

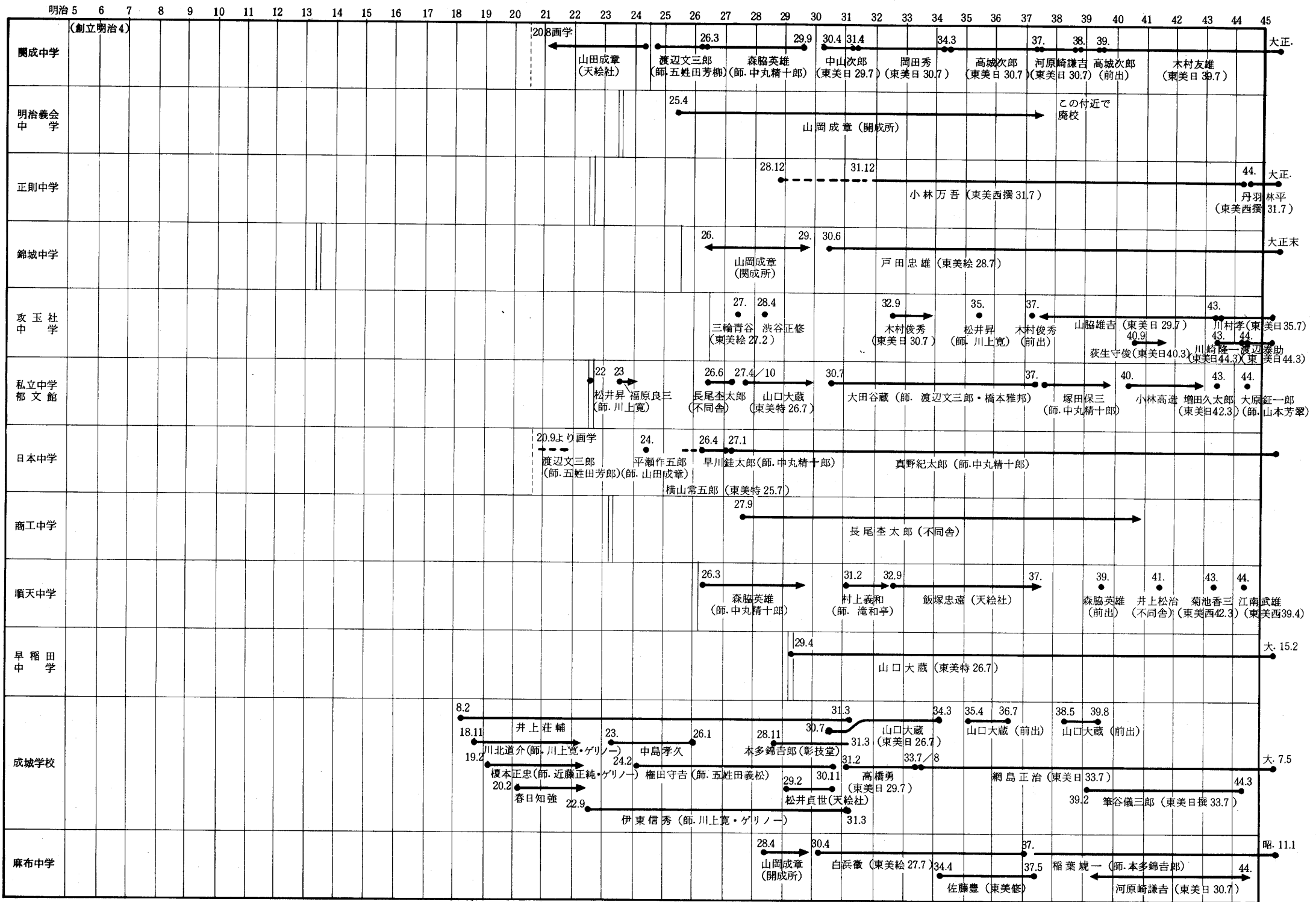
- 校名は原則として明治末年の名称で統一した。校名の変遷は繁雑になるので記入していない。創立と廃校の時期は二本の縦線で示した。ただ、私立学校の場合、家塾や宗教組織に起源をもつ学校が多く、どの時点を創立とするかは難しい問題となる。当該校の後身の学校でも最初の組織ができた時点を創立とする場合と、尋常中学校と同程度の認定を受けた時点あるいは尋常中学校となった時点を創立とする場合がある。本論文では、とりあえず起源とされている教育組織ができた時点を創立として2本線で示し、尋常中学校、あるいはそれと同程度と認定された時点をさらに1本線で示した。
- 教科として図画科を設置した時期が判明している場合は、縦の破線で示した。すなわち、それ以前の期間は図画教員のいないことが確実であるということである。
- 横の実線は勤務の期間を示し、その両端の数字が就任と退任の年月を示す。後任者が前任者退任と同月の就任ではなく、同年の次月以降就任した場合、38・8/12のように表示した。これは前任者が明治38年8月退任、後任者が同年12月就任したことを示す。また、同一人が同一年内に就退任した場合、38・8-12のように表示した。これはある教員が明治38年8月に就任し、同年12月に退任したことを示す。実線の端が矢印の場合はその時点までの勤務が確実なことを示す。
- 横の破線はその付近の勤務と推定されること、または勤務は確実でも図画担当が不確実なことを示す。
- 人名の後または下の括弧内には修学校名の略記あるいは師匠名を記入した。数字は卒業または終了の年月を示す。複数箇所へ学んだ場合、原則として後の方を記入したが、重要と思われる場合は、複数箇所や前の方を記入した場合もある。

出身校名の略記は以下の通りである。

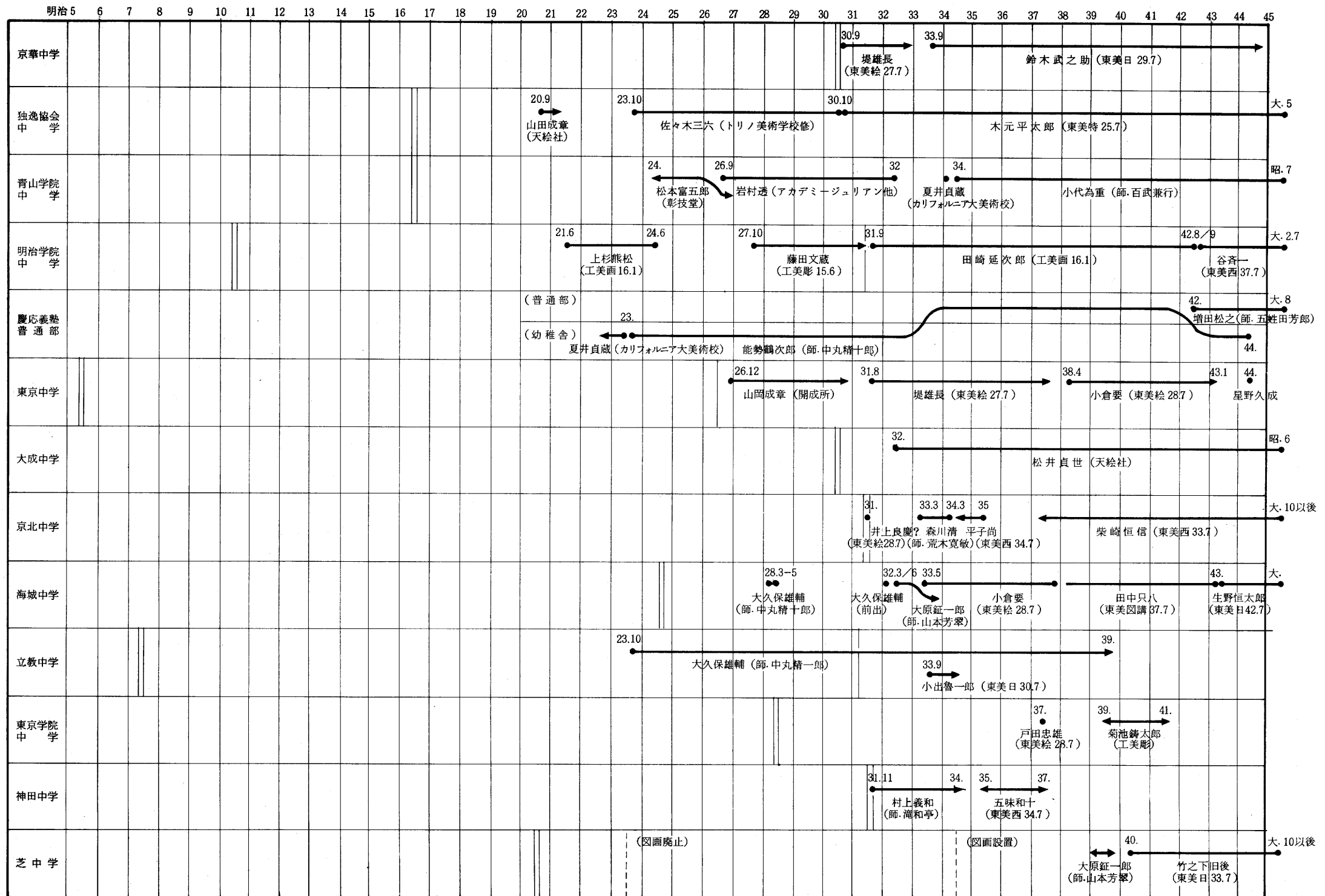
(工美術) ……工部美術学校画学科	(京府西) ……京都府画学校西宗
(東美特) ……東京美術学校特別ノ課程	(京市美) ……京都市立美術学校
(東美絵) ……東京美術学校絵画科	(東 工) ……東京工業学校
(東美日) ……東京美術学校日本画科	(東 師) ……東京師範学校
(東美西) ……東京美術学校西洋画科	(東高師手) ……東京高等師範学校手工専修科
(東美図講) ……東京美術学校図画講習科	(東高師図手) ……東京高等師範学校図画手工専修科
その他は以上の要領によって略記。	



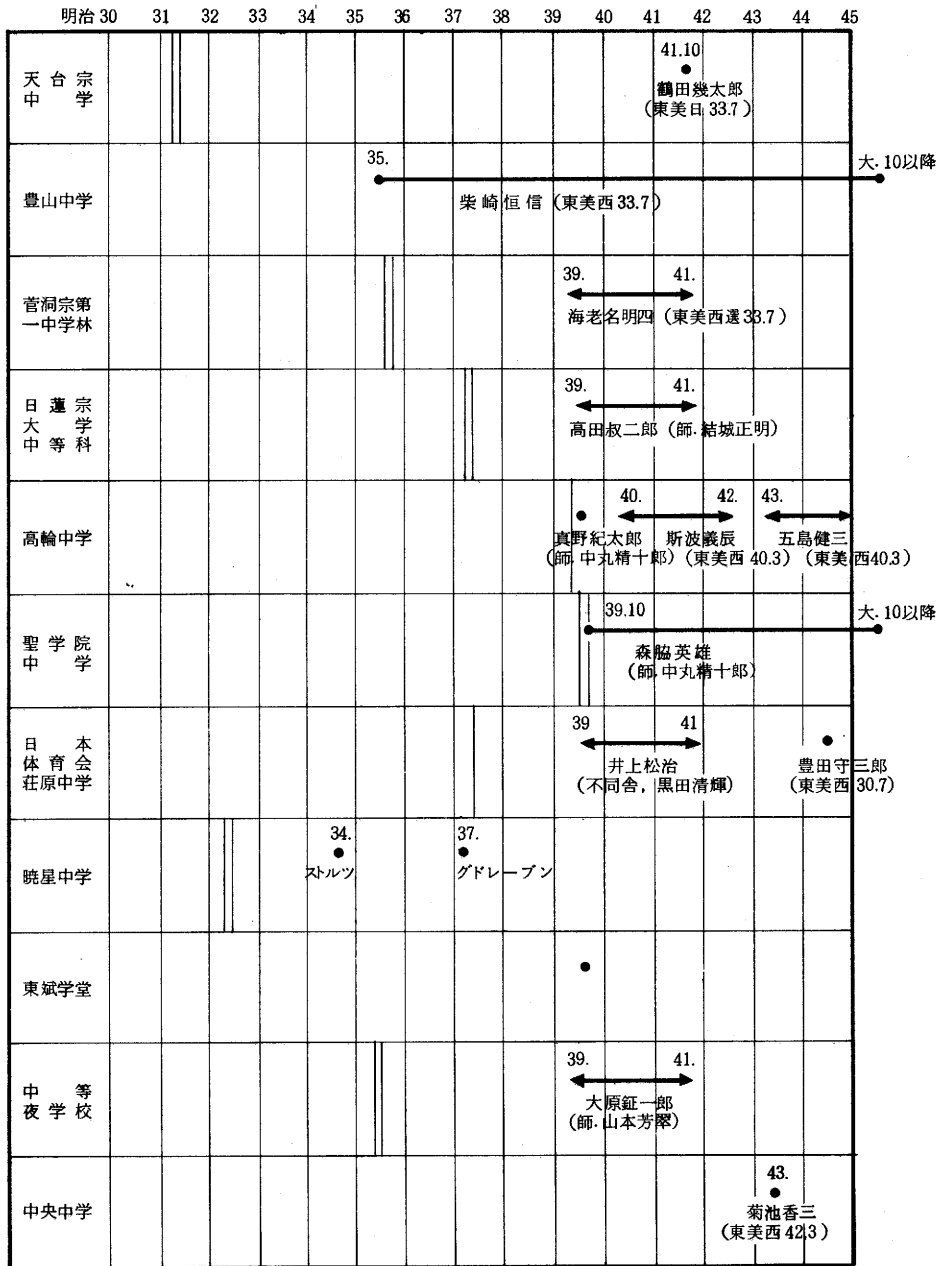
第1図 東京府の公立中等学校の図画教員勤務一覧(1)



第2図 東京府の私立中学校の図画教員勤務一覧(1)



第3図 東京府の私立中学校の図画教員勤務一覧(2)



第4図 東京府の私立中学校の図画教員勤務一覧(3)